

法然上人

いよいよ聖講習会も近づきました。本年は法然上人について語るのも、私は色々と深い感銘を頂きました。

高野の明遍僧都は三論の奥旨を極めた並ぶ者なき碩学でありました。しかし明らかに出家の要路を求めて、世間の名利を厭い、三十七歳の時、浮世の交衆をのがれて、光明山に住い、真剣に仏道を修行していられました。しかしそれでも、なお、お上から小僧都をお下げになったり、勅喚おめしがあつたりするので、五十四歳の時には、高野山の奥深くかくれてしまったほどの方でありました。

この明遍僧都が、法然上人の選択集をご覧になり、この書はいささか偏執すぎていはいしないかと思つて床に入られました。一切の諸善万行を捨てて、お念仏申すだけで助かると説かれるのですから、たしかに偏執のようであります。ところが、夜の夢に、天王寺の西の門に、病人が数知れず悩み臥しています。その間を一人の聖が鉢かぶに粥を入れて、匙さじをもちて病人の口ごとに入れて、歩かれるのであります。誰人だろうと傍かたわらの人に問えば、法然上人でありますと答えました。夢さめて明遍は謂おもうのであります。

「私が、選択集を偏執かたよつた文であると思つたのを誡められるのであろう。誠、法然上人は、時を知り、衆生の機を知りたもう聖であつたのだ。病人の様を見れば、はじめは柑子、橘、梨子、柿などの類を食することもできるが、重くなればそれもできず、わずかに重湯おもゆをもつて喉をうるほし命を支えるのである。かの選択集に一向に念仏のみをすすめられるのも、これに違ひはないのである。五濁悪世には、仏法の利益も次第に減じて、この頃はあまりに代くだりて、我等が有様は、愉えば重病の如きものである。三論法相の柑子橘も食われず、真言止観の梨子柿も食われねば、念仏三味の重湯にて、生死を出づべしである。」と語られ、たちまち顕密の奥深い自力の諸行をさしおいて専修念仏の門に入られ、名をも空阿弥陀仏と号されました。

後、僧都は上人に会い、心の不審を打ち出して、「念仏の時、心の散乱し、妄念のおこるのは、如何どうしたら止めることができましょう。」と問われた時、上人は、「この世界に住んでいる者は、煩惱具足の凡夫であります。どうして、心の散乱し、妄念の起るを止めることが出来ましょう。こればかりは源空も力およびませぬ。心は散つて乱れ、妄念はきおこり起こるとも、口に名号を称うれば、弥陀の願力に乗じて、決定往生することが出来ます。」と答えられましたので、僧都は「これを聞こうと思つて参つたのであります。」とて、挨拶もせず、出て行かれました。

後で上人は弟子たちに、「心を静め、妄念をおこさずして念仏しようと思うのは、生れつきの目鼻をとりはなちて、念仏しようと思うが如きものである。」と仰せられました。まことに法然上人こそは、誰でも救われる、浅くして深く、簡単にして重い大法を世の中に持ち出して下さつたのであります。

上人は次のように仰せられました。心すべき念仏の境地であります。

「他力の本願に乗ずるに二あり。乗まぜざるに二あり。

乗ぜざるに二というは、一つには罪をつくるとき乗ぜず。その故は、かくのごとく罪をつくれれば、念仏申すとも往生不定なりとおもふ時に乗ぜず。その故は、おなじく念仏申すとも、かくの如く道心ありて申さんずる念仏にてこそ往生はせんずれ、無道心にては念仏す共かなふべからずと、道心をさきとして、本願をつぎにおもふ時、乗ぜざるなり。

次に本願に乗ずるに二の様というは、一には罪をつくる時、乗ずるなり。その故は、かくのごとく罪をつくれれば決定して地獄に落つべし。しかるに本願の名号を唱ふれば、決定往生せん事のうれしきよと、よろこぶ時に乗ずるなり。二には、道心おこる時、乗ずるなり。その故は、この道心にて往生すべからず、これほどの道心は、無始よりこのかたおこれども、いまだ生死をはなれず。故に道心の有無を論ぜず、造罪の軽重をいはず、たゞ本願の称名を念々相続せんちからによりてぞ、往生は逐ぐべきとおもふ時に、他力本願に乗ずるなり。」

上人の御病気が重くなつた時、法蓮房というお弟子が、上人に向かつて問いました。「古来の先徳には皆その遺跡があります。しかるに上人には今、一字の精舎すら建立されてありませぬ。御入滅の後は、いづくをもつて御遺跡とすべきでございますか。」すると上人は、

「あとを一廟にしむれば、遺法あまねくない。予が遺跡は、諸州に遍満するであらう。そのゆへは念仏の興行は愚者一期の勸化である。されば念仏を修するところでは、貴賤を論ぜず、海人漁人がとまやまでも、皆これ予が遺跡である。」と仰せられました。

ある時、人々が集つて後世の事を話しているついでに「往生は魚食せぬものがあるのだ。」「魚食するものこそするのだ。」と論じ合っているのを上人がお聞きになつて、「魚を食ふものが往生するならば、鵜うこそ往生するだろう。魚を食はぬものが往生するならば猿こそ往生するであろう。食ふにもよらず、食はぬにもよらず、たゞ念仏申すものが往生はするぞと、源空は知らされた。」と仰せられた。

上人の真面目知るべきであります。

上人こそは、如来大悲の心を心として、一切衆生と共に救われる念仏の世界を一貫して歩まれたのであります。